もうひとつの自分史

愛する人へ

届けるために

2019

愛する人へ

もうひとつの自分史

自分史を残す思いとは

-1- 自分史の目的 4 - 7

-2- 取材工程 8 - 13

-3- 振り返る人生 14 - 27

-4- 考える未来 28 - 35

-5- つながる心 36 - 39

- 1 -

自分史の目的

温和な性格で、話すほどにその優しさがにじみ出る人となりの小池茂治さんが、自分史を手がけた理由を「感謝」という言葉で表現されていたのが印象的です。

優しさの風貌からは一転、随所に秘めた力を表情に語り出すその口調は、気がつくと、聞き手を自身の世界へと、ぐいぐい引き込んでいく不思議な魅力を感じていました。

初回の取材中におっしゃられていた
「たとえ遺言書に書いても、それだけでは伝わらないだろうから」
という自分史へのご意向は、これから創ろうとしている自分史に対する小池さんの心構えのように感じられ、この言葉を聞いたスタッフ間では、自分史の伝達者はご子息なんだということが手に取れました。

自分史制作は山もあれば谷もある自分の人生をさらけ出し、それをあえて客観することでその評価すらも他に委ねることになる、自身の歴史への創設です。
それは己の覚悟と人間力としてのパワーを必要とする、知的な重労働でもあります。

取材の最中に時折、小池さんはご自身が努力してコツコツと築き上げた環境を、次世代へどのようにバトンタッチしていけばいいのかを真剣に考えておられました。

自分が残せるものは何なのか・・・

たとえ遺言書に書いても、それだけでは伝わらないだろうから・・・

このような思考の全ては、周囲の人たちへの気遣いから生まれる「愛情」なのだろうと思います。

「自分史を残す思い」とは、いったいどのようなことなのでしょうか。

そんな自分史制作の原点とも言える自分史のテーマを2019年に制作された、小池茂治さんの書籍「日出ずる、信濃から」を例にとってご紹介させていただきたいと思います。

-2- 取材工程

聞き取り取材

直接お会いをし、多岐にわたる当事者の生き様をお伺いしていく中で、内容によっては自負できる話題を扱ったり、評判になったような話を取り入れたりと、時代時々に起こった事柄の相乗効果を利用して、その方の人となりを分かりやすく開示させていくことがあります。

ただし、いわゆる逸話に属する話などは、なかなかそのお話自体を引き出すことが難しいこともあります。

そんな緊張感をできるだけなくすためにも、取材をする場所はご本人が一番リラックスをされる場所が理想です。

取材の際、マンツーマンでの質疑応答形式では、お互い「ぎこちなくなる」場面も出てくるので、そんな時には「合いの手」を入れてもらえる人がそばにいることで、その場の雰囲気を和ませることができます。

複数人でお話を聞かせていただく方が、話し手も気分がいいのかもしれません。
自然と口調も滑らかになり、結果的に取材した内容にも幅が出ることになります。

ただし、いくら話が盛り上がったにしても、話をする人の集中力は２時間くらいを限界としています。

小池さんへの聞き取りは、１日に行う内容としては２時間を1セッションとして、10分ほどの休憩をはさみ通常は２セッション、調子が良ければ３セッションでお話をお伺いし、最終的な取材日数は述べ 3日を要しました。

自分史のデザインと写真選考

自分史全体の骨子として、最初の段階で人生の区切りをおおよそ5段階ぐらいに分けておきます。

幼少期 / 学生時代 / サラリーマン時代 / 起業 / 現在

それぞれの時代ごとに文章を組み立てていきますが、その最中には入れ込む写真の構想も練ります。

文章の中から受け取るイメージで足りないと思われるビジュアルを撮影したり、当事者が保管されている思い出の写真の中から選りすぐり、スキャンをさせていただきます。

小池さんは膨大な量の写真を大切に保管されており、過去の写真の使用目的としては申し分のない情報量でしたが、その反面、現在の写真が希少だったため今回の自分史制作を機に、ご家族を含めて家族写真やポートレート撮影をさせていただきました。

人生は過去があってこそ今があり、今があるからこそ未来もあります。
自分史を魅力的な内容にしていくには、過去の事柄ばかりではなく、現在の状態や未来への展望などもイメージをして、比較をさせながら写真などビジュアルを含めて文章の中にはめ込むことが理想です。

それは将来の閲覧者が、制作時の当事者との親近感を得やすくするためなのだと考えます。
ただしそのような写真でも決して多ければいいというものではなく、場合によっては涙を呑んで掲載を断念する場合もあります。

選考されるべきそれぞれの写真の思い入れは、当事者の感覚と将来自分史を読んでいただく閲覧者との感覚ではまるで次元が異なり、多くの場合、当事者が写真を投入しすぎることによって、自分史全体のデザインが徐々に「くどく」なっていきます。

自己満足の強い自分史と、目的意識をはっきりとさせた客観性のある自分史との違いが、ここで分かれます。

ただし、そのどちらかに正解があるわけではありません。
当事者が思うように創られなければ、自分史制作の意味すらもなさなくなるのですが、自分史の本質的な観点からその内容を理解していけば、掲載内容のバランスであるとか、読んだ後の充実感や心に残る印象は、あくまでも閲覧者の感覚に委ねられます。

つまり先に触れた「くどく」なる写真などの情報量の多さは、自分史全体の読みやすいデザインを崩してしまうことにもなり兼ねないため、小池さんの自分史の中でも、入れ込む写真の選考には、デザイナーと共にかなりの時間が割かれました。

その理由は、やはり「読み終えた後の印象」なのだと思います。

- 3 -

振り返る人生

人生を振り返ると、その時代ごとに自分のモチーフになっていた事柄や道具、イベントなどが思い出されると思います。

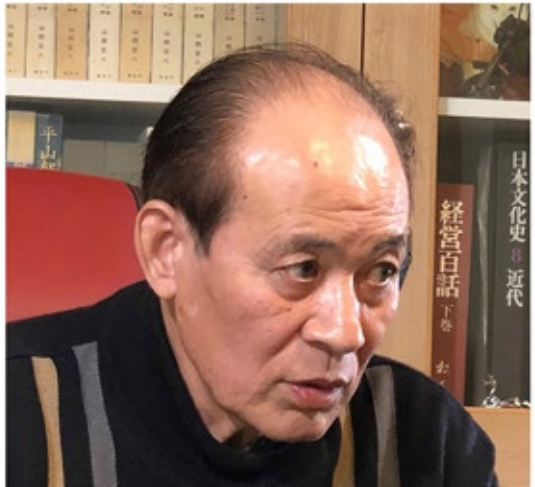
取材の際は 可能な限りそのモチーフともなる「場所」や「もの」「歴史」などの情報をいただくことにしています。

・ゆかりのある場所があればそこに行ってみる
・関わり合いのある「もの」があれば、それを撮影させてもらう
・歴史に残ることがあれば、その歴史を調べる

このような一連の行動で、そのすべての内容を自分史に入れ込む分けではないのですが、制作全体の見解を広めていく意味でも、その素材は多いに越したことはないのです。

ご本人からいただく体験談や事歴のお話には、必ずその中に人生の流れを繋げていく内容があるものです。
その事案を拾い上げながら、大枠としての骨組みを組んでいきますが、取材中によくある流れとして、１テーマだけの話で、かなりな時間盛り上がってしまう場合があります。
そんな時は話し手も夢中になっているので、聞き手も、さっさとその話を区切るようなことはなかなかいたしません。

夢中になるようなお話が、その後どのような事柄とつながっていくのかを、その時点で冷静に筋道を立ててお話できる方はごく稀でもあるため、事案内容のつじつまを合わせなどは、後日に持ち帰ったベテランライターの手腕を仰ぐことになります。


日本文化史 8 近代
経宮百話 下巻

林武全画集
川合玉堂 下
川合玉堂 上
平山郁夫 平成の画業
林 武
信州の美術

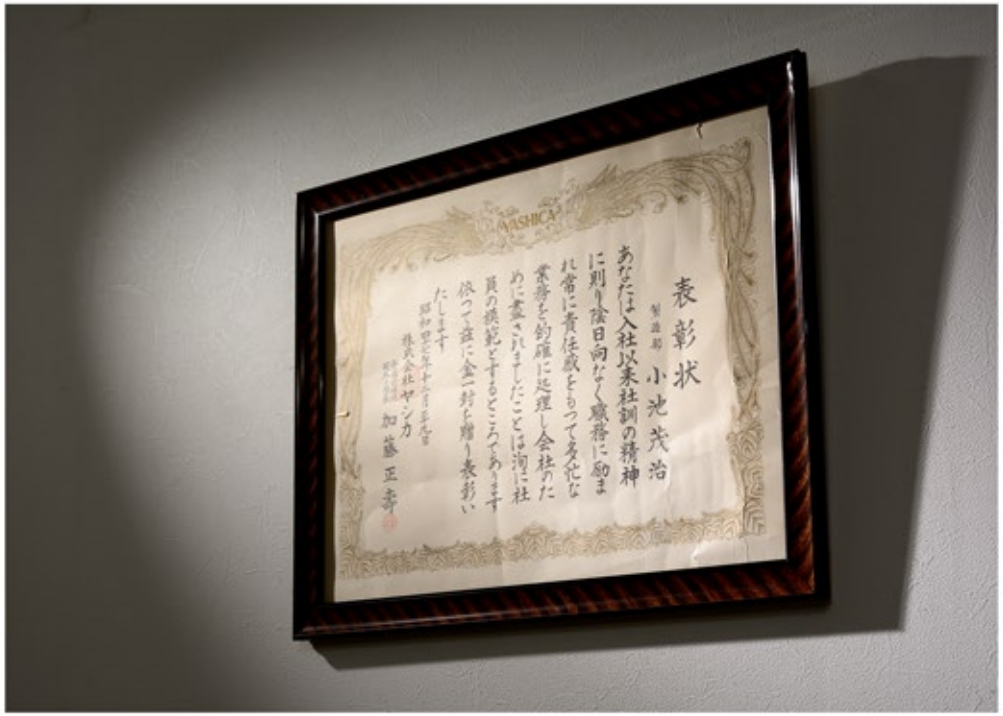
取材の現場では、常にライターが話の聞き手と同時に進行役を務め、話し手からの情報収集や意思疎通、内容確認などを含めてコントロールしていきます。

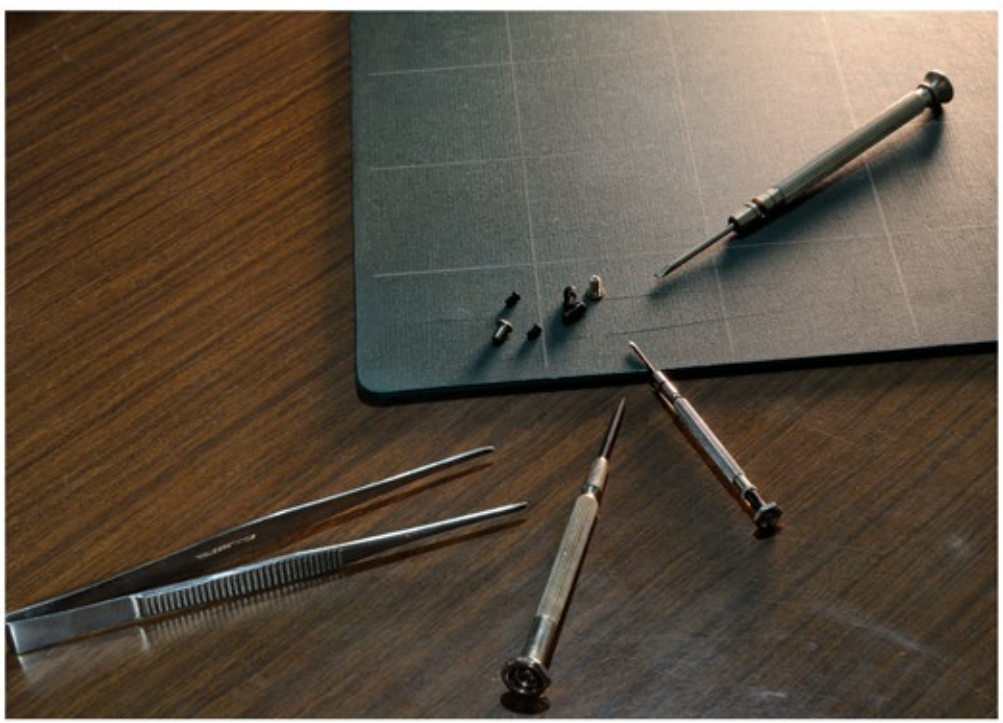
聞き取り取材でいただいた情報は、文章で表現された後に、具体的なビジュアルとしても写真が必須になります。

少なからずとも文章と関連性のあるビジュアルを程よく差し込むことにより、読み手は親近感やリアリティーに、よりいっそう共感を持っていただけるのです。

幼少期から新聞配達と共に駆け抜けた学生時代、マラソンランナーとして期待をされる選手でもありながら大学をあきらめ、社会人になってからは会社で表彰をされつつも、独立に至るまでの苦悩の日々を重ね、後の企業家として成功者になった今もなお続けている、趣味やボランティアなど社会貢献の数々は、小池さんの我慢強く実行力のある真面目な性格が、そのままストレートに現れている事柄なのではないでしょうか。

その同じ時間の経過を共にくぐってきた、正に自分史上で「必須な物や空間たち」は、その存在自体が閲覧者の心をとらえます。


YASHICA
表彰状
製造部 小池茂治
あなたは入社以来社訓の精神
に則り陰日向なく職務に励ま
れ常に責任感をもって多忙な
業務を的確に処理し会社のた
めに貢献されましたことは洵に社
員の模範とするところであります
依って茲に金一封を贈り表彰い
たします
昭和四十年十二月三十日
株式会社ヤシカ
代表取締役 加藤正寿



YASHICA
SE-CLIPPER

OFFICIAL
Rausch

黒鯛
58.0センチメートル 3.4キログラム
新潟県 直江津港
平成23年5月18日
釣人 小池茂治

- 4 -

考える未来

ライターが将来の展望の章節をまとめる際も、断腸の思いで文章をスマートにまとめていった経緯が思い出されます。

それは日数を重ねた取材の後に気がついたことなのですが、小池さんご本人は、最初から将来のことを危惧して自分史制作に踏み切ったのではないかということでした。

これは先に掲げた「たとえ遺言書に書いても、それだけでは伝わらないだろうから」という小池さんの自分史への思惑とも、何かしらの結びつきを感じ取れるのです。

過去から現在、そして未来に向けた構想が自分史の制作意欲を掻き立てるのでしょうか。

聞き取り取材に始まり、撮影取材を含めた合計７回の取材の中で、小池さんはいつも我々スタッフの提案や要望に快く応じていただきました。

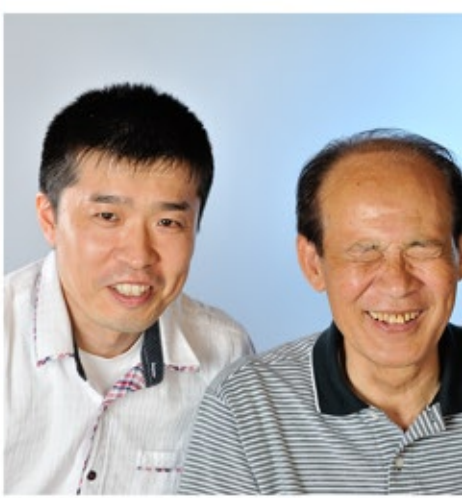
特に将来を不安視する内容のお話は、自分のこと以外で相当頭を使われているようにお見受けしました。

小池さんはプロローグでもこの自分史によって、人生で不思議に思うことを「商売人」の観点から検証されようとしています。

「社長になって何年も経つが、自分の家系には商売人が一人もいないのに、どうしてここまで商いの興味が尽きないのか・・・」

自分史を創ることが将来に向けたメッセージなのか、今までの人生の検証になるのか、その目的は一言では言い表せない 様々な想いがあるのだと思います。

小池さんが自分史の冒頭で掲げる「感謝」の気持ちの表れは、それゆえに自分史を通して、複雑な心情を整理なされたかったのではないでしょうか。



-5- つながる心

自分史は自分の歴史の概要や説明だけに止まらず、制作時点での様々な見解と展望を書物の中に埋め込んでいくことができます。

それは否定することができない自分の歴史として、本当に自分が残したいこと、言いたいことは何なのだろうかという、自分自身への問いかけの作業でもあると言えます。

小池さんは自分史の締めくくりの中で
「この世に生まれ、生きることを得たすべての人が平等に通らねばならない様々なプロセスの中で、さらなる自分自身の精神的成長をどう成し得るのか、自身の精神的終焉をどう迎えるのか、どう整理するのか」
と自問自答しておられます。

ここでおっしゃられている「すべての人が平等に通らねばならない様々なプロセス」とは、正に「人生で経過していく時間」のことを指しているのだと思います。

もしかすると自分史の制作工程は、この「様々なプロセス」の中の、一里塚のような存在なのかもしれません。

「人となり」では、可能な限りお客様に担当クリエーターが直接寄り添うことで、本当に創りたい自分の歴史書に向けて、ストレートに追求していきたいと考えております。

そのためにはビジネスの形としても、制作に関わる制約や縛りをできる限り取り除きました。

突き詰めて言ってしまえば、出来上がる自分史は決して流行ものではなく、ひと時の満足感を味わうものでもないと思うのです。

制作に関わるクリエーターとしては、一人でも多くの
方々に自分史を読んでいただきたいと強く願います。

愛する将来の読者に向けて、本当に伝えたい自分史、
本当に創っておきたい自分史を、お客様と一緒に寄り
添いながら制作に携わらさせていただけること。

「人となり」は数十年、数世紀先を視野に入れながら
お客様の大切な自分史をデザインして参ります。

もうひとつの自分史

2020年7月15日

編集　人となり
発行者　池田 道信
印刷　(株)アスカネット
発行所　人となり

〒251-0031
神奈川県藤沢市鵠沼藤が谷 2-7-3
Tel. 0466-65-3878 / Fax. 0466-65-3879
URL　https://hitotonari.jp/
E-mail　info@hitotonari.jp

https://hitotonari.jp/

Produced by Hitotonari